

【資料】分野別・日本語習得レビュー論文の紹介

～メタ＝レビューへの助走～

佐々木嘉則（お茶の水女子大学）

1. 本稿の目的

本プロジェクトを通じて、日本語の習得・教育に関する 39 本のレビュー論文が既に『第二言語教育・習得の研究最前線』に掲載・発表されている。これらに加え、『第二言語としての日本語の習得研究』『日本語教育』などの専門誌や各種専門書籍にも少なからぬ数のレビューが掲載されている（現時点で 28 本を確認済み一別稿「日本語 S L A 研究に関連するレビュー文献一覧」参照）。とはいえ、いまだ概観報告されていない領域も多い。そこで本稿では、これら計 67 本の既発表／発表予定のレビューがどのようなテーマをとりあげたのか、手つかずのテーマは何か、を探る。

あるテーマや領域を扱ったレビューがないのには、そもそもレビューの対象となりうる研究そのものが少ない場合と、研究は既に活発になされているのにも関わらずたまたまレビューがまだ出ていない場合とがありうる。後者の場合は本稿筆者が知りうる限りその旨を指摘したが、もちろん全ての研究分野に精通しているわけではないので見落としも多いことと思う。そういった限界をわきまえつつ、本稿ではさしあたり

- ①日本語習得に関するレビュー論文を分類する枠組みの試案を提出する
- ②日本語習得に関するレビュー論文がこれまでにカバーした領域を、大雑把ながらも提示する

という二つの目的を達成することを目指した。本稿を叩き台として、各分野の専門家がさらに正確かつ詳細なレビューのレビュー（「メタレビュー」）を完成させ、わかりやすい見取り図を提示してくださることを切望する。

2. 分析の枠組み

既存のレビュー論文を洩れなく含めることができるような分類を念頭において次のような分類枠を便宜的に設定した。

1. 「日本語習得研究全般の概観」
2. 「習得理論・原理」
3. 「文法習得（主に統語論）」

4. 「品詞論」
5. 「語彙・文字」
6. 「音声」
7. 「語用論」
8. 「習得環境」
9. 「個人差要因」
10. 「言語変種・ジャンル・レジスター」
11. 「個別技能」
12. 「国語学理論」
13. 「教育課程」
14. 「テクノロジー利用」
15. 「異文化適応」
16. 「地域事情」

これら 16 領域に既存のレビューを分類した。以下、それぞれの領域ごとに簡単な紹介を加える。無論これらの領域区分は相互に排他的なものではないので、一つのレビューが複数の領域にまたがる場合もある。例えば尹(2004)がレビューの対象としている授受動詞は、統語習得研究の一環であると同時に、品詞論の下位分類にも該当する。一見してわかるとおり上記の領域設定はあくまで便宜的なものであり、既に確立された外的基準や特定の言語教育理論から導きだされたものではない。今後発表されるであろう多くのレビューを含めて 5 年後に再度このような分析をおこなうとするならば、これとは大きく異なった枠組みが必要になることも考えられる。

3. 日本語習得・教育に関するレビューの分野別分類

(エッセイ的なもの、日本語習得に言及していないものは含めず)

3.1. 全分野の概観：

長友 (1993, 1998/1999)、吉岡(1999)、坂本(2004)、Kess & Miyamoto (1994)

長友 (1993, 1998/1999) は当時の日本語習得研究草創期の研究状況を通覧したものである。その後、特に今世紀に入ってから発表された日本語習得研究文献は膨大で、もはや一本の論文によってその全貌を伝えることは極めて難しい状況になっているだけに、それぞれの研究分野の原点を知る上では長友の先駆的総括は今でも示唆に富む文献といえる。

Kess & Miyamoto (1994)は他の文献と趣を異にし、日本語に関する心理言語学文献（第二言語習得を含む）の長大な書誌情報リスト（個別の解説はなし）である。他に類をみない書籍であるので、紹介を兼ねてここに挙げることにした。

3.2. 習得理論・原理

生成文法（普遍文法理論）：Kanno (in press)
処理可能性モデル：峯(2002)
社会学習論的アプローチ：柳町(2003)
定式表現：菅谷(2004a)
プロトタイプ理論：菅谷(2004b)
競合モデル：佐々木(2003)、Sasaki & MacWhinney (in press)

（下線は『第二言語習得・教育の研究最前線』収録のもの。以下同。）

生成文法理論にもとづく Kanno(in press)のレビューがまもなく出版されるのに対し、言語類型論や機能主義言語学にもとづく研究のまとまったレビューは発表されていないようである。ただし、プロトタイプ理論（菅谷 2004）と競合モデル（佐々木 2003; Sasaki & MacWhinney, in press）は、機能主義言語学と親和性の高い認知心理学説である。

3.3. 文法習得（主に統語・意味論）

時制（テンス）／相（アスペクト）：Shirai (2002) 、菅谷(2002)
法（モダリティ）：黒滝(2002)
態（ボイス）：
授受動詞構文：尹(2004)
複文構造
名詞修飾：
統語・意味論：齋藤（大関）(2002)、大関(2003)、
形態論：高橋(2004)
引用：杉浦(2002)

日本語の3つの主要な態表現のうち授受動詞構文に関しては尹(2004)があるが、受動態および使役態についてはまだレビューがない。また、複文構造についても条件節、「～とき」節、理由節（「～ので」「～から」）、譲歩節（「～のに」「～けれども」）などまだ概観されていない分野が多い。

3.4. 品詞

自立語

用言：名詞修飾用法【高橋(2004)】

動詞：

活用：【菅谷(2004)】

複合動詞：【松田(2002)】

授受動詞：尹(2004)

可能動詞：【辛(2002)】

体言

指示代名詞：森塚(2003)

再帰代名詞：Thomas (in press)

ここでは伝統的な国語学の品詞区分にしたがい先行研究を分類した。その結果、用言の名詞修飾用法については高橋(2004) が形態論的観点からレビューしていることが確認されたが、述語用法についてはまだ同様の試みがなされていない。用言のうち動詞については 4 本のレビューがあるが、さらに多様な切り口からのレビューが可能であろう。

さらに、「付属語」についても系統だったレビューがみあたらない。強いて挙げれば、峯 (2002) が処理可能性理論の枠組みで助詞習得研究のいくつかを検討しているのみである。助詞は日本語文法習得の中でも最も活発な研究分野の一つで、例えば「は」「が」の習得だけでも多くの研究が発表されていることを考えると、これは予想外の結果であった。

3.5. 文字／語彙習得

概観：谷内(2002)、森(2003)、Koda (in press)

付随的語彙学習：谷内(2003)、吉澤(2004)

漢語：陳毓敏(2003)

複合動詞：松田(2002)

研究方法：山内(2004)

山内(2004)が指摘するとおり、語彙習得を扱った既存のレビュー（松田 2002 を除く）は紙幅の多くが欧米言語を対象とした研究の概観にあてられ、その後に数少ない日本語習得研究を紹介するというものであり、日本語の語彙習得研究の遅れを痛感させる。因みに山内(2004)はその前半で、谷内(2002)、 谷内(2003)、 陳毓敏(2003)、 松田(2002)、長友 (1999) に加え森山 (2002) の解説も含めた

6本の語彙習得関連のレビューを通覧しその対象範囲・切り口を比較しつつ交通整理をおこなっている。このくだりは日本語語彙習得に関するレビューのレビュー、すなわち「メタ＝レビュー」と言ってもよく、この論文が本稿執筆の一つの刺激剤となったことを付記しておきたい。

さらに詳しくみると、付随的語彙学習に関して谷内(2003)、吉澤(2004)という2本のレビューが発表されているのに対し、系統的語彙学習・教育に関してはこれらに相当するものがない。ただし、松田(2002)は単なるインプットだけでは複合多義動詞の中核的な意味の理解に至り難いことを述べており、系統的語彙学習の必要性を示唆したものといえる。

また、上に挙げた7本の論文は陳毓敏(2003)の漢語研究のレビューを含め全て語彙に関するものであり、狭義の文字習得を扱ったものは見あたらない。漢字学習に関して膨大な研究の蓄積があることを考えると、「あるべきものがない」というのが正直な印象である。

3.6. 音声習得

音声学

概観：戸田(2001)

評価：小池(2003)、松崎寛 (2004)

特殊拍：戸田(2003)

長音：小熊(2002)

ポーズ：石崎(2003)

英語母語話者にとっての「ら」行音、韓国語母語話者にとっての清濁音の区別など、日本語の単音の習得にはいくつかの「難所」があることが経験的に知られているが、それらに的を絞って扱ったレビューはみあたらない。一方、特殊拍と長音はそれぞれ戸田(2001)、小熊 (2002) によりレビューされている。

また、イントネーションやストレスもカバーされていない。さらに、同じく言語の「音」といっても音声学 (phonetics) ではなく音韻学 (phonology) に関わる論題（たとえば連濁現象）はこれまでのところ、第二言語習得論の立場からのレビューの対象になっていないようである。

3.7. 語用論の習得

ポライトネス：深田（2002）

この分野でまとまったレビューは深田（2002）以外みあたらない。個別の発話行為の発達の研究などのレビューは今のところ手つかずのようである。日本語学習の難所の一つとされる待遇表現の習得についても、先行研究を総括した文献はみあたらない。

3.8. 習得環境

インプットとインターアクション：Wei 諸石(2003)

インプットと教育：横山（1998）

Focus on form: 小池(2002)、小柳（2002）

明示的文法教示の効果：向山(2004)

語彙習得のレビューと同じく、この領域のレビューも大半が欧米言語を対象とした研究の紹介に割かれ、その後に日本語に関する研究が付け足されるという構成が踏襲されている。

3.9. 個人差要因

情意的要因

概観：小宮(2003)

動機づけ：守谷(2002)

守谷（2002）もまた紙幅の大半を欧米圏での動機研究の概観に充てており、日本語に関する動機づけ研究の遅れが痛感される。それ以外の情意的要因である不安やリスクテイキングに関しては小宮(2003)が簡単に紹介しているだけで、まとまったレビューも存在していないというのが現状である。また、情意面以外の日本語学習適性や認知的特性に関しては研究も少なく、レビューも見あたらない。

3.10. 言語変種・ジャンル・レジスター

ラ抜き言葉：辛(2002)

フォリナートーク：徳永(2003)

ビジネス日本語：李志暎(2002)、近藤(2004)

アカデミック日本語：大島(2003)

言語変種やジャンル／レジスターに関するレビューはいくつかあるが、これらを全て読んでも分野の全体像を掴むのは難しく、「点描的」という観を免れない。

3.11. 個別技能

読む：

概観：近松(2003)

高次処理：堀場(2002)、Horiba (in press)

低次処理：Koda (in press)

聞く：

スキーマ理論：尹(2002)

聴解ストラテジー：横山(2004)

書く：

概観：畑佐由紀子(2003)

ピアレスポンス：池田(2002)

アカデミック・ライティング教育：大島(2003)

評価基準：田中・長阪(2004)

話す

文産出：Iwasaki (in press)

会話

会話分析と SLA：森 (2004)

コードスイッチング：Nishimura (in press)

ターンテイキング：金(2002)

あいづち：陳姿菁(2002)、柳(2003)

電話会話：林(2002)

「読む」「聞く」という理解スキルのレビューはいずれも、言語心理学的な処理モデルを踏まえており、近松(2003)以外は高次レベル処理と低次レベル処理のいずれかに重点をおいている。（「聞く」に関しては、低次レベル技能のレビューが今のところみあたらない。）これに対し、「書く」スキルのレビューは「ピアレビュー」（池田 2002）、「アカデミックライティング」（大島 2003）、「評価法」（田中 2004）など教授法やカリキュラムとより直接的な関連があるものである。「話す」スキルに関わるレビューはほとんどが会話分析的研究の概観である。実生活における「話す」活動は会話ばかりではなく、学会発表におけるような独話も含まれているのであるが、それを視野にいれたレビューはみあたらない。

また、読む・書く・聞く・話すの4技能と並ぶもう一つの言語スキル、すなわちメタ言語技能（文法性判断など）に関するレビューも今回調べた範囲内では発見できなかった。

3.12. 国語学理論

文章論：李貞旼(2002)

国語学的研究から産まれた文章論の枠組みを日韓の対照分析研究まで含めて概観したのが李貞旼(2002)である。ただしこの論考も第二言語学習者の中間言語分析にまでは至っていない。国語学的な日本語研究の理論枠組みを第二言語習得研究に直接応用した事例は少なく、したがってそういった研究のレビューも見いだしがたいようである。

3.13. 教育課程

非母語話者児童を対象とする教育

多言語併用教育：原(2002)

第二言語話者児童教育における母語使用：朱(2004)

母語話者を対象に含めた教育

スピーチコミュニケーション（国語教育）：村松(2002)

非母語話者児童を対象とした教育に関しては国内での実証的研究の蓄積が乏しく、原(2002)、朱(2004)とも主に欧米圏で他言語を対象に行われた研究の知見を論拠として援用しながら、国内での実践例を紹介するという構成をとっている。一方、母語話者を対象とした村松(2002)は、国内での教育心理学や教科（国語科）教育学の豊富な知見の蓄積を踏まえ、日本の土壌に根をおろした展望を開陳している。

3.14. テクノロジー利用：

畑佐一味(2003)

日本語教育における IT 技術活用のレビューは、畑佐一味(2003)が入手しやすい。そこで紹介されている先行業績の多くは実践的な開発報告であり、効果の厳密な実証や原理的な解明を試みた研究は数少ない。恐らくは分野の現況を反映しているものと思われる。

3.15. 異文化適応

田中(1998)

田中(1998)は在日留学生への適応支援という視点を踏まえて異文化間心理学の立場から書かれた重厚な展望論文である。これ以外には、同種のレビュー論文はみあたらなかった。

3.16. 地域事情・日本語教育史

海外の日本語教育

豪州（1970 年代～現代）：鈴木(2002)

韓国（19 世紀末～現代）：河先(2003)

これまでにあげた諸分野と異なり、各国の日本語教育の実態やその歴史に関する研究の概観は「事情報告」的なレポートとの間に明確な境界線が引きにくいという特質をもつ。後者の色彩の濃い文書は『世界の日本語教育』『日本語教育』などにしばしば掲載されており、それらを含めると膨大な数になるので、ここではそれらを網羅することは敢えてせず、本科研プロジェクトから産まれた 2 本のレビュー（鈴木 2002、河先 2003）を紹介するにとどめる。地域事情や日本語教育史に関する文献についてはそれぞれ独立したレビュー（またはメタレビュー）を著すことが可能であろう。

4. 結語

以上から明らかなとおり、助詞の習得、待遇表現の習得など多くの重要な研究領域が、まだ概観論文という形でまとめられることなく残っている。今後、さらなる挑戦を期待したい。